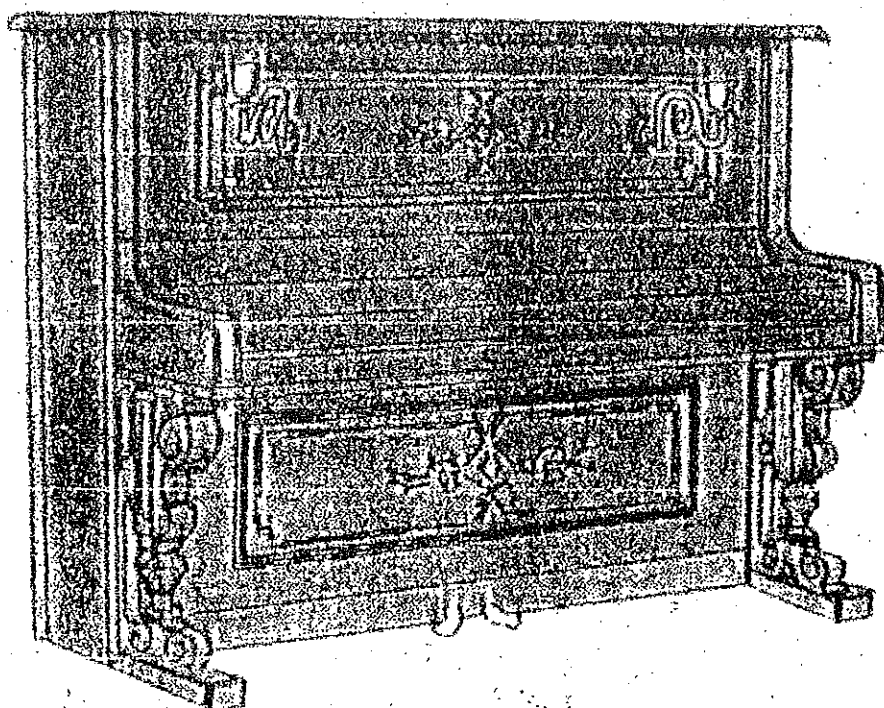


大場小学校のピアノ



●グロリアン・スタインウェイ社(西独製)
製造年1886年 製番6207

本校元職員 二宮 嘉城 先生より (R 2 ・ 4 ・ 1 0)

大場小学校のピアノ(伝説のピアノ)

大場小学校入学時(昭和14年)から「資料室にあるひピアノは山崎の飛田卓さん(1年先輩)の叔父さんが、日露戦争のとき旅順の戦いに勝利した乃木大将と敵のロシアのステッセル将軍が会見したおり、将軍の世話をした飛田大佐が気に入られ将軍愛用のピアノをプレゼントされた。凱旋のとき故郷の大場村に持ち帰り大場小学校に寄付したもの」と先輩たちに教わり昭和63年まで信じ切っていた。

ところが、昭和62年に赴任して来た第24^代校長の根本順弘氏が学校の玄関に置いてある朽ち果てたピアノに目をつけ、平山ピアノ社の社長に会ってピアノのいわれを聞き修復を思い立った。そのことが日本国中の新聞に掲載された。

昭和63年修復のはこびとなり平山ピアノ社の手で校舎から修理工場に運ばれて行った。平成元年5月には修復に成功して学校にもどってきた。14日にはピアニストの津田真理を招いて修復記念演奏会を開いき、名器の音色に参加した人々はうっとり聞き入った。

そして、このピアノの事がいろいろと分かってきた。

- ① 日露戦争(明治37・8年戦争)で、東郷平八郎大将率いる日本海軍とロシアのバルチック艦隊が日本海で戦ったおり(明治8年5月日本海海戦)、ロシアの戦艦アリヨールを拿捕した。その中に積まれていたのがこのピアノではないかと日露戦史研究家の大戸宏氏(富山県金沢市)の手紙で知った。それが長い間横須賀の海軍工廠の兵器庫に保管されていた。(当時日本では洋琴と言っていた)
- ② それを知った海軍主計特務少尉の飛田一成氏(東茨城郡大場村山崎出身・明治17年ー昭和47年6月 行年88歳)が、妻里子(飛田穂州の妹)の生まれ故郷大場村への望郷と大場小学校への愛校心に感激し、妻の遺言で海軍工廠にあるピアノを小学校に贈る事を思いついた。〔美しき心の記念として〕参照)
- ③ この旨を海軍省に願い出たが、個人には払い下げと言うことなので大場小学校の第8代校長の長山藤之助先生から、学校へ寄附をお願いする形で海軍省と交渉した。

その結果、海軍省も快諾し払い下げが決まった。(官房第四〇八九号参照)

大正12年2月横須賀から水戸までの輸送費(当時120円)を飛田氏が支払い、水戸からは牛車で塩が崎経由で大場小学校まで運ばれてきた。

当初は式典で君が代とか式歌ぐらいにしか使われなかったが、戦後は音楽の時間に使われ昭和41年頃から傷みがひどくなり、調廃棄しようと言う話も出たが玄関に陳列しておいた。

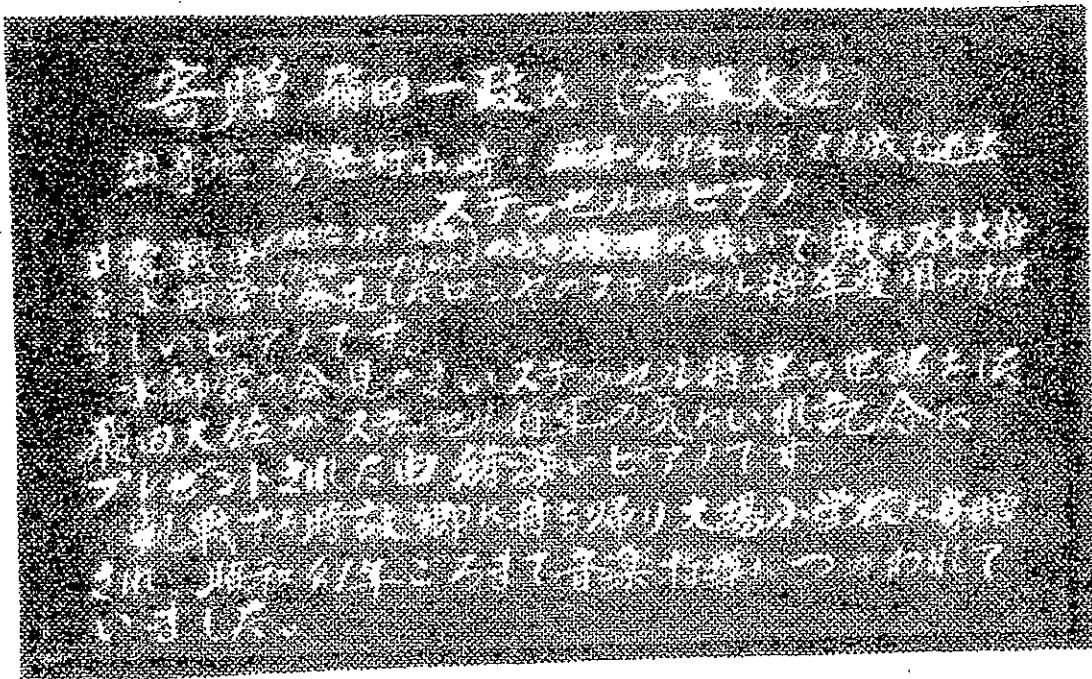
ドイツのグロトリアン・スタインウィッチ社からは「本社の製品に間違いない(製造No.6202・1885年製?)」との証明書が届けられた。

また、息子の飛田一成氏の息子の保一氏から「美しき心の記念として」や海軍省の書類を見せられた。また、「父は海軍なので陸軍の乃木大将とは一緒にならないし、日露戦争にも参加していません。父の名誉のため訂正して下さい。」との申し入れがあった。

平成5年2月には作家の五木寛之氏が「ステッセルのピアノ」取材のため来校し、同時に日本テレビによってこの様子が放映された。

平成6年2月には水戸市立博物館で「伝説のピアノ特別陳列展」(写真のみ)が開かれた。、水戸のピアノ・旭川のピアノ・金沢のピアノ・遠軽のピアノ
現在は、年1回音楽室でひピアニストを招いて校内演奏会を開いている。

(何代目かの校長が書いて玄関に置かれていたピアノの上に立て掛けられていた)



[illegible]

官房第四〇九號ノ三

大正十一年十二月十一日

海軍省副官 藤田 尙 徳

茨城縣東茨城郡大場村村長立川稻吉殿

同縣同郡大場尋常高等小學校校長長山藤之助殿

教授用トシテ洋琴下附ノ件

九月十四日附出願ノ本件今回詮議相成横須賀海軍工廠在庫ノ洋琴（ビ
アノ）壹臺ヲ無償下附方同鎮守府司令長官へ訓令セラレ候條御了知
ノ上現品ハ同工廠兵器庫ニ就テ受領相成度

右通知ス

追テ現品荷造及運搬ニ要スル費用ハ貴殿等兩者ニ於テ負擔スル儀
ト御承知相成度申添候

（終）

美しき心の記念として……

——由緒ある洋琴が母校に送らるるまで——

亡妻里子が、松頼寂しき山崎の奥津城に眠つてから春風秋雨既に三歳の月日が送り迎へられました。里子は實に微々たる一筆記時代から私を内助した糟糠の妻であり、慰安者であつたことを直明するに躊躇しないのであります。

大正十一年七月六日、不幸な私が突如として、この好伴侶を失つた事は、其の精神上に與へられたところ、決して勢しとせないものであります。併し亡妻の貞淑に多大の感銘を有する私は、里子が残して呉れた唯一無二の寶である遺児保一の成長を楽しみに、親戚故舊等の勧めを一切退け、今日尙獨身自炊の不自由なる生活を續けてゐるのであります。先頃私は非常な幸運に浴して特務少尉に昇進いたしました、君命を奉じた時私は里子世にありしならばと窃に欣をわかつ一人を失つた事に不足を感じたのであります。其の際にも某上長官から私の獨身自炊生活に就いて慰安のお言葉をいたしたき聊か光榮を感じた次第であります。しかも尙私の心は、是等の事總てを亡妻の鞭撻であると告白致します。勿論里子が遺児のために後來の人を欲せぬであらうなどと忖度を擅にして、かうした生活を存続するものと早合點されるのは極めて迷惑な事であります。私は飽くまでも亡妻との愛の結晶たる遺児保一

を健全に育て上げねばならぬ責任を痛感する餘り今日の生活を喜んでゐるのであります。

里子は水府城南の大場に私と郷里を同じふして生まれ、其の小學校に學びました。故郷の大場は貧しい一寒村に過ぎませんが、遙に袖ヶ浦大洗の濤聲を聞き、廣浦秋月を控へ、山水明媚の地であります。感傷的な彼の女は後年一家の主婦として世帯の苦勞を味ふやうになつても、よく故山の景物に想を馳せ、垂髪少女の頃、嬉々として遊んだ小學校の思出を語りました。彼の女が二十餘年前の少女時代を随時に夢と織り出して、母校を愛した可憐な心を思ふ時、餘りにいじらしく涙を誘ふものがあります。恐らく彼の女は其の短かりし生を終る迄、母校のことを忘れずになつかしむたものなのでせう。里子の遺言がそれを雄辯に語つてゐます。

『香奩の一部は必ず母校に寄贈する記念品に充てて下さい』筆をとつてゐた私の心は、その燃ゆるが如き愛校心の流露に感激せずには居られませんでした。

私が故人の遺志を成就せんがため日夜心を砕いた事は今更申上げるまでもありません、私は筆を進

めて亡妻に對する義務を果した前後の事情を綴つて、如何にして得難き洋琴が、母校大塙小學校の少年少女諸君の前に提供されたかを、お知らせして置きたいと思ひます。

私は里子の歿後母校寄贈の記念品に就いて、種々頭腦を悩め、あれかこれかと物色に努めたのであります。が容易に適當なるものを獲る事が出来ませんでした。私が稍々失望してゐる矢先たまたま私は思ひがけぬ話を聞込みました。それは海軍に於て戦利品の洋琴を拂下げると云ふことでありました。音楽を好んだ故人の記念品には耳よりの話だと思ひました私は、如何なる困難を排してもと深く決心するところがあつた、其の實否を確かめましたところ事實ではありますけれ共、私の微力では奈何共なし難い程度のものでありました。

併し私は茲で斷念しては故人に對して申譯がない、飽迄成功への道をたどらねばならぬと、自ら自らの心を勵まし、日頃私が最も尊敬せる、私の直屬上官たる海軍中佐中村横須賀海軍港務部々員(當時副官)に事情を陳べ只管同中佐の盡力を請ふたのであります。温情に富める中村副官はいたく私の心事に同情を寄せられ、早速横須賀兵器庫から海軍省、艦政本部等あらゆる關係各部に御交渉をたまはりました。其の結果無償で下付されると云ふ確信を得る迄下話を進められ、方法として學校より願出づるが最も便利ならむと私に親しく指圖して下さつたのであります。

私は天にも昇る心地がいたしまして、中村副官に深甚なる敬意を拂ふと同時に、取るものも取り敢へず數日間の賜暇を乞ひ歸郷の上、校長長山藤之助君に諮りました。長山校長は勿論私の兄弟達も非常に喜んだのであります。そこで荷造運搬に要する費用並手續交渉等は一切私が引受くる事を約し、村長校長連名の願書を作成して、直接海軍大臣に宛、出願しましたところ、他よりの出願も二、三ありしとのことでした。が其れ等の出願を排し、其の年十二月末無償下付の特別恩命を拜受しました。依つて本品の受領を済まし、荷造運搬等總て約束通私が負擔しました、其の額は百貳拾餘圓の僅少なものであります。が、これ實に亡妻里子に對して諸方の辱知より香花の料として供へられたものであります。

かくて由緒ある洋琴は翌十二年二月完全に母校の教壇に据ゐられ、亡妻の遺志を遂げる事が出来たのであります。

亡妻の残した美しい心が、この洋琴の一部に喰入つて永く母校子女の心を和ぐる事を思ふ時、私は其處に忘れ難い愛戀の情を唆らすには居られません。里子は一無名の海軍々人の妻として其の短生涯を終りました。が、其の心事の優にやさしく、棺を蓋ふ數時間前迄故郷を忘れず、幾多の後進の爲めに其の小さい心を送つた女らしきたしなみ、私は母校の爲めに或は故郷の婦人のために誇りたいと云ふ氣持が湧いて來ます。

私は今如上の経緯と根本精神とを大略述べました、筆はややもすれば、ひとりよがれの感みもありませうけれ共、子女訓育上の一挿話ともならば、私の満足は申すに及ばず、聊か亡妻の霊を慰むることが出来やうと思ふのであります。

風や寒く中里の丘に吹いて月冷かなり、故人望郷の臺に立ちて三十里外の山河をなつかしみしところ、我今現にありて亡妻を懷ふ心切なるものあり。

終りに私は参考のために該洋琴の出所を追記して置きませう。

一、日露交戦中明治三十八年一月旅順開城の時の鹵獲品にして、爾來海軍々樂隊に於て使用し來たりしものなり。

此の洋琴は露軍籠城中ステツセル將軍を初めとして幾多の將士を慰安したもので恐らく開城の日には悲しみの曲が奏され、更らに日軍の有に歸しては直ちに凱歌の曲がたたかれたであらう。悲しむにつけ喜ぶにつけ、此の思出多い洋琴が晩年亡妻里子の霊の働きによつて母校を飾り、少年少女の友たり得たのは奇しき因縁と云はねばならぬ。

一、製作年、製作會社共不明なるも専門家の鑑定によれば獨逸製なる事疑ふ餘地なしと。

一、海軍に於て附與せし鹵獲當時の想定價格金壹千百參拾五圓也。

大正十三年木枯の吹く日横須賀中里

亡妻の久しく住みし小屋にて

海軍主計特務少尉 飛田 一致